

看護学生の死生観の学年間比較

田代 隆良¹・永田 奏²・出田 順子²・安藤 悦子¹

要旨 長崎大学医学部保健学科の看護学生270人（1年生68人，2年生68人，3年生68人，4年生66人）を対象に死生観に関する自記式アンケート調査を行った。学生は，死を「永遠の眠り」「肉体と精神の眠り」「神秘・不可解なもの」と捉え，学年間に違いは認められなかった。自分の死に関してもっとも嫌なこととして，「物事を体験できなくなる」「予定していた計画や仕事ができなくなる」は1年生に，「痛み・苦しみ」は4年生に多く，有意差が認められた。死生観に影響を与えた因子は「身近な人の死」「テレビ・映画」「葬儀への参列」「読書」の順であり，学年間に違いは認められなかったが，「講義」「実習」は4年生が有意に多かった。しかし，講義や実習の影響は学生の期待よりも小さく，日々の授業において死の準備教育を行う必要があることが示唆された。

保健学研究 19(1): 43-48, 2006

Key Words : 死生観, 看護学生, 死の準備教育

はじめに

社会が豊かになり，公衆衛生，医療が発達したわが国では，健康障害を有する人や死にゆく人の多くは病院や施設に入院・入所している。その結果，死は私たちの日常生活から切り離され，身近に体験する機会は少なくなった。このような環境で育った若者が看護師を目指すとき，講義で老化や病気について学び，実習で病気に苦しむ人や死にゆく人に接することになる。学生の多くは初めて死に直面し，死にゆく人を前に自分は何ができるのかを思い悩み，不安になる。現代人のライフスタイルと価値観は多様化し，生と死に対する考え方，価値観も一様ではない。最近，終末期医療のあり方が問題となっている背景には，国民の死生観の多様化・複雑化があり，看護師はしっかりと自己の死生観を持つ必要がある。

対象と方法

1. 対象

対象は長崎大学医学部保健学科看護学専攻の1年生から4年生までの学生300人である。

2. 研究デザイン

集合法によるアンケート調査。質問票は，近藤¹⁾の「死に関するチェックリスト」を参考に独自に作成した。質問は，①死に関する経験，②死に対するイメージ，③自己の死について，④死を語ることにについて，⑤死生観に影響を与えた因子の各項目から成り，選択回答形式としたが，その他を選択したものには具体的内容を記載してもらった。各学年の授業終了後の休み時間に研究の趣旨，倫理的配慮等について説明した後，同意が得られた

学生に質問票を配布し無記名で記載してもらい，講義室出口で回収した。

3. 調査時期

2005年7月

4. 分析方法

学年間の有意差検定は χ^2 独立性の検定を行い，有意水準0.05未満を有意差ありとした。統計ソフトはSPSS 10.0 Jを用いた。

5. 倫理的配慮

本研究は，長崎大学医学部保健学科倫理委員会の承認を受けた。

結 果

1. 対象の属性

全看護学生300人中270人から回答が得られた（回収率90%）。性別は女性250人，男性20人，年齢は18歳～31歳，平均20.1±1.9歳である。学年別の人数，性，年齢を表1に示す。

表1. 対象

学 年	人数 (女性/男性)	平均年齢 (範囲)
1 年生	68人 (62/6)	18.7歳 (18~21)
2 年生	68人 (60/8)	20.0歳 (19~23)
3 年生	68人 (64/4)	21.0歳 (20~31)
4 年生	66人 (64/2)	21.6歳 (21~25)
計	270人 (250/20)	20.2歳 (18~31)

1 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科保健学専攻看護学講座

2 長崎大学医学部保健学科看護学専攻元学生

2. 死に関する経験

死別経験は97.8%，葬儀への参列経験は94.4%とほとんどの学生が経験していたが、実際に臨終に立ち会った経験は19.6%だった。いずれも学年間に有意差は認められなかった。死別経験数は平均2.8人、死別した相手は、祖父母47.0%，親戚23.7%，友人・知人15.1%が多く、学年による差はなかった。患者との死別経験は5.6%と低いが、1年生0%，2年生1.5%，3年生4.4%，4年生16.7%と学年間で有意差が認められた ($p < 0.001$) (図1)。

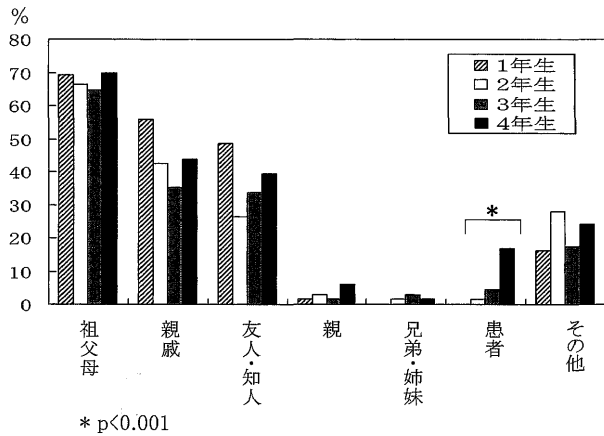


図1. 死別経験した相手

子供時代における家庭での死の話題に関する質問では、「語り合った記憶がない」が44.1%と最も多く、「おおっぴらに語られた」は31.1%であった。また、「不快感があった」は18.5%、「ほとんどタブーであった」は3.7%、「自分はのけ者にされた」は2.6%だった。学年間に差は認められなかった。

3. 死に対するイメージ

死に対するイメージは、子供時代は「天国か地獄に行く」が55.9%と過半数だったが、現在は「天国か地獄に行く」は8.1%と減少し、「永遠の眠り」40.0%、「肉体と精神の活動の停止」26.7%、「神秘・不可解なもの」21.5%が増えていた。学年別にみると1年生で「永遠の眠り」が多いが有意差は認められなかった。また、「特に考えたことはない」は3年生と4年生は1人ずつ(1.5%)と1年生、2年生より少ないが、有意差はなかった(図2)。「その他」の内容を見ると、子供時代は4学年とも死に対して「怖い」「悲しい」「星になる」などが多かったが、現在は1年生は「怖い」「存在しなくなる」「悲しみ」、2年生は「怖い」「悲しみ」「無になる」「避けられないもの」「生まれ変わる」、3年生は「永遠の別れ」「新たな旅立ち」「いるのが当たり前だったものがいなくなる」、4年生は「人生の最期」「思い出は残る」「魂は輪廻転生する」「人生の完成」「永遠の別れ」「避けられない」「無になる」と学年により違いがみられた。

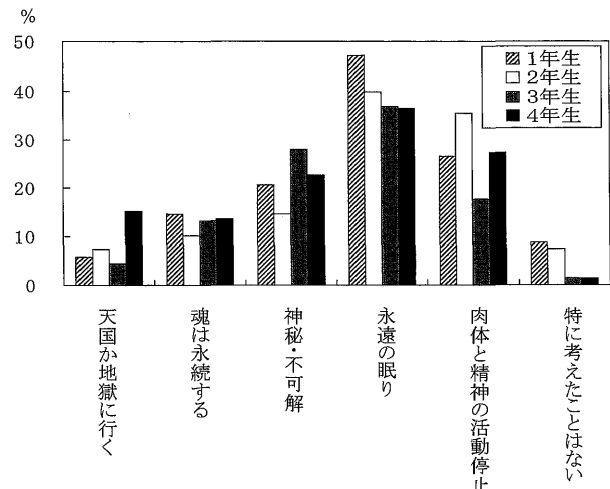


図2. 現在の死のイメージ

4. 自己の死について

自分にとって死とはなにかという質問には、「生命の終わり」が43.0%と最も多く、次いで「永遠の眠り・憩い」29.6%、「この世の生命は終わるが靈魂は生き続ける」12.6%だった。1年生は「永遠の眠り・憩い」が他学年より有意に多く ($p = 0.016$)、「生命の終わり」を上回っていた(図3)。

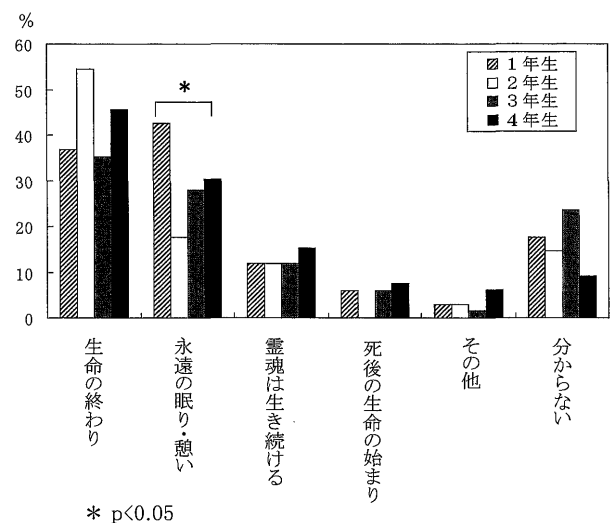


図3. 自分にとって死とは

自分の死に関してもっとも嫌なことでは、「家族や友人たちを悲しませる」が33.3%と多く、次いで「物事を体験できなくなる」23.6%、「痛み・苦しみ」22.2%、「死後の生命がどうなるか分からない」18.9%、「自分の体がどうなるか分からない」10.0%、「家族の面倒をみるのができなくなる」9.3%の順であった。「物事を体験できなくなる」($p = 0.045$)、「予定した計画・仕事ができない」($p = 0.023$)、「痛み・苦しみ」($p = 0.004$)は学年間で有意差が認められた(図4)。

自分の死を考えたときに感じることでは、「恐怖感を

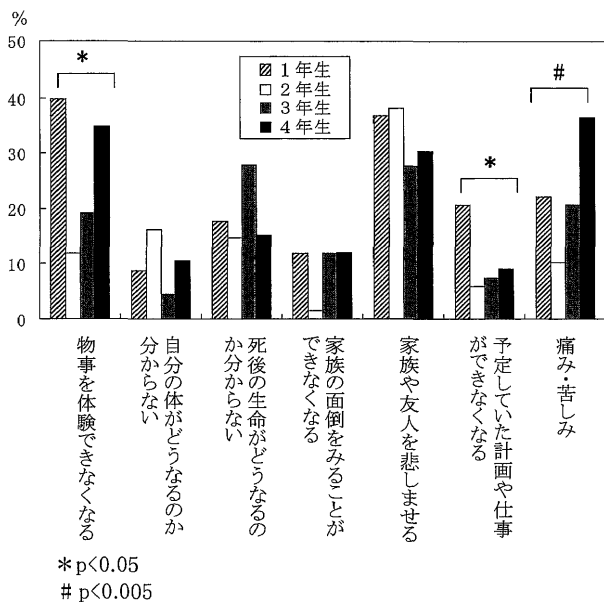


図4. 自分の死に関してもっとも嫌なこと

覚える」42.2%、「気分がすぐれなくなる」19.3%、「失望・落胆する」11.1%、「諦める」6.3%、「目的を失う」2.2%など否定的感情が多く、「生きていることの喜びを感じる」という肯定的感情は26.7%だった。「気分がすぐれなくなる」で学年間に有意差 (p=0.022) が認められ、4年生は他学年より少なかった (図5)。「その他」の内容では、「不安」「悲しみ」「喪失感」という否定的感情と、「一日を精一杯生きよう」「後悔しないように生きる」という前向きな記載が見られた。

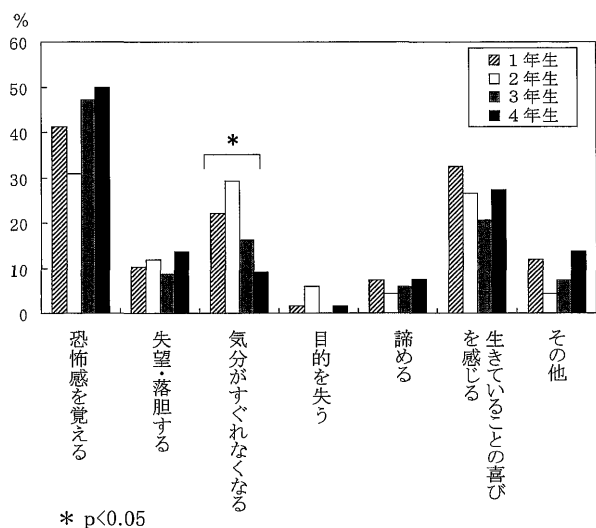


図5. 自分の死を考えたときに感じること

5. 死を語ることにについて

自分が不治の病であることを知った場合にそのことを他人に語るかどうかという質問に関しては、「語る」41.9%が「語らない」21.9%より多かった。また、「語りたがどうやって語ってよいか分からない」は36.2%

だった。いずれも学年間に有意差は認められなかった。

語らない理由としては「相手の反応が分からないから」34.4%、「何を語ってよいのか分からないから」30.6%、「相手が聞きたがらないと思うから」16.7%だった。「その他」は18.3%であり、「他人に気を遣わせたくない」「悲しませたくない」「相手に迷惑をかけたくない」「言われた相手も困ると思うから」などと記載されていた。

死に関して語るときに感じることは、「ごちなさ」37.3%、「憂鬱感」32.5%が多く、学年間に差はなかった。「その他」の内容では、「悲しみ」「空虚感」「喪失感」など否定的感情が多いが、4年生では「生への素晴らしさを感じる」と記載した学生もいた。

自分の死について語りたい相手は、「親」62.2%、「配偶者」53.0%、「友人・知人」43.3%、「兄弟・姉妹」38.1%が多く、「看護師」8.9%、「医師」7.4%、「宗教家」0.4%は少なかった (図6)。自分たちがこれから就こうとする看護師という専門職に「語りたが」と望むものは、1年生16.2%、2年生5.9%、3年生4.4%、4年生9.1%と、1年生は他学年に比べると多いが有意差はなかった (p=0.075)。

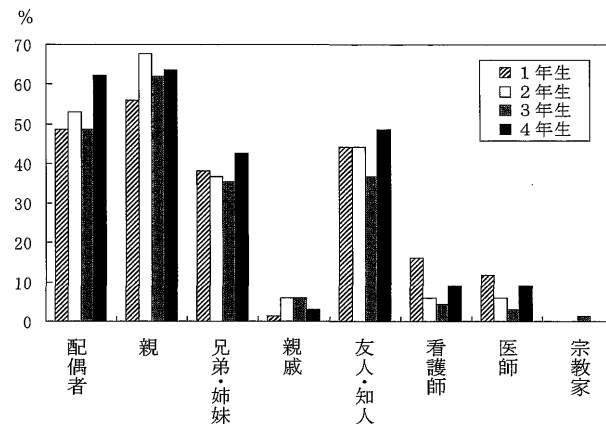


図6. 自分の死について語りたが相手

6. 死生観に影響を与えた因子

死生観に影響を与えた因子について尋ねた多選択肢・複数回答の質問では、「身近な人の死」が49.3%と最も多く、次いで「テレビ・映画など」33.0%、「葬儀への参列」24.1%、「読書」18.9%の順だった。「講義」と「実習」はそれぞれ10.0%、3.0%と少ないが、「講義」は学年が上がるにつれて増加し (p=0.003)、「実習」は4年生で10.6%と他学年より有意に高かった (p<0.001)。また、宗教は7.0%と少なかった (図7)。

上記質問とは別に実習が死生観に影響を与えると思うかと尋ねた二者択一の質問には83.7%が「はい」と答えた。また、今まで死生観に影響を与えるような実習を経験したかという二者択一の質問には16.3%が「はい」と答えており、学年別では、1年生4.4%、2年生5.9%、3年生19.1%、4年生36.4%と学年が上がるにつれて増

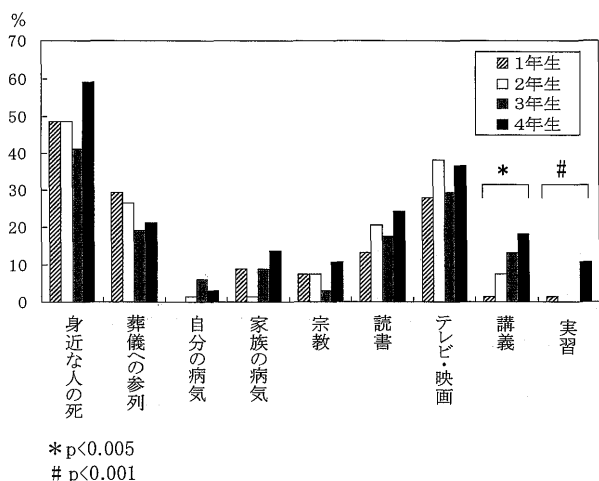


図7. 死生観に影響を与えた因子

加し、有意差が認められた ($p < 0.001$)。

宗教の役割に関する質問では、「まったくない」と答えたものが34.8%と最も多く、「ほとんどない」30.0%、「さほど重要ではない」17.6%、「やや重要」15.7%、「非常に重要」1.9%であり、学年間に有意差はなかった。

考 察

看護学生は他分野の学生とくらべ、入学時より生と死について関心を持っているものが多く、学年が進むにつれさらに深く考えるようになるといわれている^{2,5)}。死生観の形成には、入学までの様々な経験と入学後の体験および教育が大きく影響する。本学では、1年前期に病院・施設の見学実習、1年後期に基礎看護学実習Ⅰ、2年後期に基礎看護学実習Ⅱ、3年後期に領域別看護学実習、4年前期に老年看護学実習、地域看護学実習、助産学実習(選択)を行っている。調査は7月に実施したので、4年生はほぼすべての実習を終了しているが、1年生は見学実習のみ、2年生は基礎看護学実習Ⅰまで、3年生は基礎看護学実習Ⅱまでの経験である。

死に対するイメージは、幼少時代は過半数のものが「天国か地獄に行く」と答えていたが、現在は「永遠の眠り」「肉体と精神の活動の停止」「神秘・不可解なもの」など多様化していた。これは小児期から青年期へと成長することによる自然な変化と考えられる。学年間に有意差は認められなかったが、1年生で「永遠の眠り」が多く、「特に考えたことはない」は3、4年生で少ない傾向にあった。その他の内容は、4年生では「人生の完成」「想い出は残る」「輪廻転生」など死を肯定的に捉えた記載が見られた。

学生は、死を「生命の終わり」と捉えるとともに、「永遠の眠り・憩い」と感じ、「靈魂」や「死後の生命」を信じるものもいた。自分の死を考えるとときに「恐怖感を覚える」ものが各学年とも多かった。このことは死ぬときの痛みや苦しみへの不安、私という存在が消滅する

ことへの不安、死後の生命がどうなるか分からないという未知なる死後への不安からくるものと思われる。青年期にある若者の多くは、死は高齢者や病者に起こるものであり、若くて健康な今の自分には関係ないと楽観的に考えている。看護学生は講義や実習を通して、人は誰も死から逃れることは出来ないことを知り、親兄弟や友人など身近な人に、そして自分にも必ず死が訪れるという現実気づいてゆく。有意差はなかったが、3、4年生の方が1、2年生よりも恐怖感を覚えるものが多かったのは、死をより現実的に捉えているためと思われる。また、30%近くのもの「生きていることの喜びを感じる」と答えている。死を考えることは生きる意味を考えることであり、死について深く考える機会が増えれば、生の喜びも増えるのではないだろうか。

自分の死に関して嫌なこととして、「物事が体験できなくなる」「痛み・悲しみ」「死後の生命がどうなるか分からない」といった不安とともに、「家族や友人を悲しませる」「家族の面倒をみることができなくなる」といった他者への思いやりがみられた。1年生では「物事を体験できなくなる」「予定していた計画や仕事ができなくなる」といった自分に関するものが他学年より多かったが、4年生では「痛み・悲しみ」が他学年より多かった。4年生は実習でがん患者や終末期患者をケアしたのも多く、死をより身近に捉えているためと思われる^{6,9)}。

自分が死の病であることを知った時、語る方法が分からない者も含め、約8割の学生が自分の死について語りたいと思っている。語りたい相手として多かったのは親、配偶者、次いで友人・知人、兄弟・姉妹であった。これは青年期に共通の傾向といえるが、自分たちがこれから就こうとしている看護師あるいは医師に語りたものは少なかった。有意差はないものの看護師・医師とも1年生で最も多く、2年生、3年生と低下し、4年生で少し増加しているのは興味ある結果である。看護師を目指し、大学に入学したばかりの1年生は看護師・医師に漠然とした期待と信頼感をもっているが、2年生、3年生と次第に薄れること、しかし実習で医療者と患者の触れ合いを身近で見、自ら経験することにより、再び、医療者に対する期待と信頼感が高まってくるのではないかと推測される。宗教家に語りたものは1人(0.4%)のみであり、日本では宗教あるいは宗教家が身近に存在していないことが示された。

自己の死生観形成に影響を与えた因子では、祖父母など身近な人との死別経験が最も多かった。身近な人の死を悼み、悲しむことが、死生観の形成に大きな役割を果たすものと思われる。ほとんどの学生が死別経験と葬儀への参列経験を有しているが、臨終に立ち会った学生は約20%と少なかった。現代は多くの人が病院で死を迎えているため、子供が臨終に立ち会う機会は少ない。住み慣れた自宅や家庭的な環境を提供してくれる施設で死を迎える人が増えれば、臨終に立ち会う機会も増える

のではないだろうか。

学生はテレビ・映画などのメディアや読書からも死生観形成に大きな影響を受けている。身近な人の死を「二人称の死」とすると、ニュース番組や事故の報道における死は「三人称の死」であり、また、ドラマや映画における登場人物の死は「作られた死」といえる。「三人称の死」「作られた死」であっても、それを機会に生と死の意味について考え、友人や家族と語り合えば、自己の死生観を深めることが出来るであろう¹⁰⁾。最近の若者は本を読まなくなったと言われているが、読書も死生観形成には重要である^{11,12)}。読書もテレビ・映画も4年生は1年生よりやや多いものの有意差は認められなかった。学生時代は感性豊かな時期であるので、もっと本に親しむ必要がある。教員は人生の先輩として、死生観形成に役立つような本を推薦したり、感想を話し合ったりする機会をもつことも必要であろう。

死生観形成に影響を与えた因子として、講義、実習と答えた学生は少なかった。また80%を超える学生が、実習は死生観に影響を与えると思っているにもかかわらず、実際に死生観に影響するような実習を経験したものは少なく、学生の期待と現実の間に乖離がみられた。患者との死別経験がある学生は4年生でも16.7%だったことから分かるように、すべての学生が患者の死を経験するわけではない。学生が自己の死生観を持つとともに、人には多様な死生観があることを理解できるよう、講義、演習、実習など日々の授業において死の準備教育^{13,15)}を行う必要がある。患者の死に直面した学生は、死の恐怖を感じながらも患者の力になりたいと思っている。しかし、患者の死を乗り越えることが出来ず、看護師となることに不安や恐れを感じる学生もおり、個々の学生に対する教育的サポートも必要であろう。

謝 辞

本研究を行うにあたり、アンケート調査にご協力いただきました長崎大学医学部保健学科看護学専攻の学生の皆様に深く感謝いたします。

文 献

- 1) 近藤裕：「自分の死」にそなえる。春秋社、東京、1994、70-102。
- 2) 一色康子、河野政子：看護学生と他分野学生の死のイメージに関する調査研究－調査項目の所属間の比較による検討－。看護学統合研究、2(1)：57-61、2000。
- 3) 波多野梗子、村田恵子：看護学生の終末期患者への援助的認識と看護行動傾向の学年による差異。看護研究、14(1)：62-73、1981。
- 4) 古屋洋子、小野興子、横山宏：看護学生の死生観。山梨県立看護大学短期大学部紀要、9(1)：115-128、2003。
- 5) 水谷成子：死生観形成過程にある看護学生のコーピング行動の比較。看護展望、22(1)：76-81、1997。
- 6) 奥出有香子：看護学生の対象別実習における死における意識の変化。順天堂医療短期大学紀要、12：86-93、2001。
- 7) 長田京子：臨床実習における看護学生の死生観の変化 実習中に患者の死に出あった学生を中心として、臨床死生学、7(1)：33-39、2002。
- 8) 丹下幸子、金子晶子、細矢智子：終末期看護実習における看取りの体験－実習記録および感想文の分析をとおして－。日本看護学会論文集（看護教育）、31：206-207、2000。
- 9) 奥祥子、塚本康子、堀内宏美、日浦瑞枝、中俣直美、牛尾禮子：看護学生の死についての態度構造、鹿児島大学医学部保健学科紀要、14：13-19、2004。
- 10) 佐藤妙子、寺内暁子、森千沙子、南雲千加、神田清子：看護学生とその母親の死に対するイメージの比較と対話状況、ホスピスケアと在宅ケア、9(1)：34-40、2001。
- 11) 福山幸恵：看護学生を対象とした読書による「生と死の教育」の基礎的研究、「生」と「死」のイメージを中心にして。日本看護学教育学会誌、14(3)：9-18、2005。
- 12) 落合清子、長井美佐子：看護学生の「死のイメージ」の変化 読書による死生観確立への影響について。聖隷クリストファー大学看護短期大学部紀要、27：7-13、2005。
- 13) 山崎裕二：看護・医療系短大等における「死の教育学」の実践(1)「死に関する看護・医療系学生の意識調査」の授業への導入。日本赤十字武蔵野短期大学紀要、15：89-96、2002。
- 14) 上原佳子、宮本裕子：看護学生が過去の死別時に感じた生と死についての体験。看護教育、44(8)：693-699、2003。
- 15) 小熊厚子、加藤愛子、山田皓子：「死の準備教育」にゼミナールと特別講演を導入した試み。看護展望、20(7)：66-71、1995。

A view of life and death in nursing students

Takayoshi TASHIRO¹, Kanade NAGATA², Junko IDETA², Etsuko ANDO¹

1 Department of Nursing, Graduate School of Biomedical Sciences, Nagasaki University

2 Former Student of Department of Nursing, School of Health Sciences, Nagasaki University

Abstract A questionnaire survey was conducted in a total of 270 nursing students (68 1st grade, 68 2nd grade, 68 3rd grade, 66 4th grade) in Nagasaki University School of Health Sciences on July 2005. Most students consider a death as "eternal sleep" "sleep of body and soul" "mysterious", and there was no significant difference by the grade. On the other hand, "can not experience any more" "can not do a scheduled plan and work any more" were significant in 1st grade, and "death throes" was in 4th grade. The factors which influenced the view of life and death were "familiar person's death" "television and movie" "attendance to the funeral" "reading" in this order. There was no difference in these factors between the grades, whereas "lecture" and "nursing practice" were significant in 4th grade. It was suggested that nursing students think a death more realistic through the lecture and practice, however, the influence of that was smaller than their expectation, therefore the death education might be necessary and important to establish own view of life and death.

Health Science Research 19(1): 43-48, 2006

Key Words : view of life and death, nursing students, death education